

# 「ボールの場合」

ウィラ・キャザー著 鳴原あきら訳

＊「ボールの場合」は初出版と改訂版があり、この翻訳ではその差異をわかるようにしています。なお、素人の翻訳ですので、誤訳等はお寛恕下さい。

＊青文字は、1906年版にあって、1920年版になかった箇所。

＊赤文字は、1920年版にあって、1906年版にない箇所。

ボールはその午後、それまでの数々の不品行のために、ピッツバーグ高校の職員室に呼び出されていた。一週間前に停学処分を受けていたのだが、彼の父親が校長室をたずね、うちでも息子には手を焼いているので、どうかしてほしい、と申し出たからだ。ボールは慇懃に微笑みながら職員室へ入ってきた。服はいささか寸足らず、前のボタンをはずした黄褐色のビロードの襟のオーバーも、すっかり弱ってすりきれているが、そんな出で立ちも、彼が身につけていると洒落た感じがしたし、きちんとしめた黒のネクタイにオパールのついたピンをつけ、ボタンホールには赤いカーネーションをあしらっている。この花飾りは停学をくらって改悛の情を示してきた少年にふさわしいものではなく、教師たちの神経を逆撫でした。

ボールは年の割には背が高く、とても痩せていて、そびかやかした肩幅も胸も狭かった。なにより人目をひくのは、病的なまでにギラギラ輝くその瞳で、しかもわざと芝居がかったやり方で周囲を見回すので、子どもくせに妙に攻撃的に感じられた。その瞳孔は異様に大きく、ベラドンナ（瞳孔拡大薬）の常用を思わせるほどだったが、そのガラスのようなきらめきは、薬で出せるものではない。

どうして呼び出されたかわかっているかね、と校長に問われて、ボールは復学したい旨を礼儀正しく告げ

た。それは本意ではない、だがポールは嘘をつくのは慣れっこだったし、実際、摩擦をさけるのに必要不可欠だった。教師たちはめいめい訓示を垂れたが、まったく異常な事例であるため、その言葉には深い恨みと憎しみがこめられた。彼の罪状として、問題行動、反抗的な言動などが挙げられたが、教師たちは、事態の真の原因をどうにも言葉にできず、もどかしい思いをしていた。それはつまり、教師側は少年の病的なまでの無礼な態度をひしひしと感じているのに、本人の方は軽蔑を隠そうとする努力をまったくしていないからだ。以前、ポールが黒板に向かって、ある段落の要約を書こうとした時、英語教師が脇に立って彼の手を正しい場所へ導こうとした。ポールは身震いしてぱっと飛びすさり、両手を勢いよく後ろへひっこめた。びっくりした女性教師は、いっそ殴られたより傷つき、恥ずかしい思いをした。この侮辱は反射的で、はつきりと彼女に向けられたものだけに、その傷は深いものになった。ともあれ彼は、相手が男性だろうと女性だろうと、教師に対しては一樣にこういう行動をとり、嫌悪感をうけつけた。ある授業ではいつも両目の上に手をかざしていたし、別の授業では暗唱の最中にずっと窓の外を見ていたし、また別の授業では、講義に対してふざけた批評を途切れることなく並べたてた。

この日、教師たちは、すくめた肩と軽薄な赤いカーネーションが彼の態度を象徴していると感じて、英語教師を筆頭に、容赦ない攻撃をあげせかけた。そのあいだじゅう、色のない口唇から皓い歯をのぞかせて彼は微笑んでいた（彼の口唇はしょっちゅうヒクヒクと動き、眉をあげる仕草は、人をいらいらさせ、侮辱していると感じさせた）。ポールより上級の少年達も、このような試練には心つぶれ、涙を流すというのに、彼のぴったりはりついたような微笑みは、一度も消えることがなかった。彼の不快を示す仕草は、コートのボタンをもてあそぶ神経質そうな指の震えだけ、あとは、帽子を抱えたもう片方の手が、時折びくんと動くことぐらいだ。他人が自分を観察し、何か探りだそうとするのを警戒しているのか、彼はいつも微笑みながら周囲を見渡していた。この自意識過剰な態度は、少年らしいのびやかさから遠くかけ離れたものだったため、彼は常に傲慢、《すかした奴》と見なされた。

彼の処分に關して話は続き、教師の一人が少年の生意氣な口のきき方をその通り繰り返したので、校長は彼に、女性に対してそういう物言いをするのは礼儀正しいことだと思ふかね、と訊いた。ポールは軽く肩をすくめ、眉をひそめた。

「さあ」彼は答えた。「礼儀とか、そういうことはあまり考えていませんでした。なんというか、習慣で、何も考えずにしゃべっていたと思います」

校長は**思いやりある人間だったため**、何も考えずにしゃべる習慣をやめようと思ったことはないかね、ときくと、彼はニツコリ笑つて、やめた方がいいですね、と答えた。もう歸つてよろしい、といわれると、彼は品よく一礼して退出した。そのお辞儀の仕方は、あの言語道断な赤いカーネーションのように、氣障めいていた。

教師たちは絶望していた。美術の教師が皆の気持ちを代表するように、あの少年には、はかりしれない何かがあるといい、そしてこう付け加えた。「ただ生意氣だから、あんな妙な笑い方をするんじゃないな。何かに憑りつかれてるみたいだろう。それにあの子は身体が丈夫じゃない。**コロラドで生まれたそうだが、母親は長患いをしていて、あの子がうまれてからすぐに亡くなったらしい。それでどこか、よくないところがあるんだ**」

この美術教師はふとした觀察から、彼の皓い齒と強烈な生氣を放つ瞳に、みながずっと惑わされていたことに気づいた。とある暖かな午後の授業のこと、少年は画板にもたれて居眠りをしていた。教師はあまりに白い、静脈の浮いた彼の顔に気づいて、驚いた。目のまわりは老人の肌のようにくたびれて皺が刻まれていたし、眠っているにも関わらず、口唇は例によって、ひくひくと動き続けていた。

教師たちは、後味の悪い、不快な気分のまま学校を出た。たか一人の子供にあんな復讐心を抱き、厳しい言葉で切り刻み、あまつさえお互いをけしかけて、度を越えた非難という、身の毛もよだつ振る舞いに及んだことに傷ついていた。哀れな捨て猫が、悪ガキ共に追いつめられている様を思い浮かべた者さえいた。

ポールは、オペラ「ファウスト」の《兵士の合唱》を口笛で吹きながら坂道を駆けおりてゆく。浮かれた姿を教師たちに見られていないか、ときおり背後をギロリと窺った。かなり時間をくったし、夕方からカーネギー・ホールで案内係の仕事をする日だったので、家に戻って夕食をとるのはやめにした。

コンサートホールにつくと、ドアにはまだ鍵がおりていた。外はうすら寒いので、彼は絵画展示室へ上がった——この時間はいつも人がいないからだ——ラファエリのパリの街角の華やかなスケッチや、優雅な青いベニス風の風景の一、二枚、そんなものが彼の心をいつも浮き立たせた。展示室に誰もいなかったのも、彼は嬉しくなった。隅に年取った守衛がひとり座っているが、新聞を膝にひろげ、片目を眼帯で覆って、もう片方は閉じたままだ。ポールはこの空間を一人じめし、小さく口笛を吹きつつ、隅から隅まで大胆に歩き回った。リコの青い絵の前に腰を降ろし、そこですっかり夢中になってしまった。はっと気づいて時計を見ると、もう七時を過ぎている。びっくりして立ち上がり、階下へ駆けおりた。それでも彫像の部屋からのぞくアウグストウス・シーザーに顔をしかめてみせたり、階段の途中のミロのビーナスに、卑猥なポーズをとってみせるのも忘れなかった。

ポールが案内係用の控え室に飛び込んだ時、数人の仲間が先にきていたが、彼は興奮さめやらぬまま、急いで着替えにとりくんだ。珍しくもこの制服は、彼の寸法にぴったりで、実にうつりがいい、と本人は思っていた——身体に添う直線的なラインの上着が、いつも気に病んでいる胸の狭さをきわだたせるのを知っていたが。ポールは着替えをする時、音楽室から聞こえる、調律中の弦がビュンと鳴る音や、管楽器のファンファールに没頭し、興奮してくるのだった。今夜は特に調子を外して浮かれていて、同室の少年たちをいつまでもからかったり邪魔したりしたため、おまえおかしいぞ、と床に沈められ、組み敷かれてしまった。

それでなんとか気持ちの鎮まったポールは、早くきた観客を席に案内するため、劇場入口へ飛んでいった。彼は模範的な案内係だった。通路を急ぐ時も、品よく笑顔をやささない。彼に不可能はなかった。伝言を伝えることも、プログラムをもってくることも、それが人生最大の喜びであるかのようにこなして、彼が受け

持ち区画の客はみな、この少年はなんて魅力的な子かしら、こちらの顔をちゃんと覚えているし、物腰もうやうやく丁寧だし、と感心していた。劇場が満員になると、彼はますます活発になり生気に満ちて、頬やくちびるにも血のいろがさしてくる。まるでポール自身が招待主の、素晴らしい晩餐会かのように。楽団員が出てきて着席した時、地元の名士の工場主がシーズンいっぱい借り切っている席に、彼の英語教師がチケットを手にしてやってきた。彼女はポールにチケットを渡ししながら、気恥ずかしさをうっかり顔に出してしまい、あわててツンとすましたために、あとで愚かしい気持ちになった。ポールは一瞬ギョツとし、教師を外へ追い出したいとさえ思った。いったいこの女は何しにきた、洗練された階級と華やかな人々が集う場所に何の用だ、と。彼女の身なりをざっと見て、そんな場違いな格好で一階席に座るなんて、とあきれた。彼は教師のために椅子をおろしてやりながら、おそらくチケットは工場主が親切でくれてやったものだろう、まあこの教師にだって、自分と同じく、この席に座る権利があるんだと思い直した。

交響曲が始まると、ポールはほっとため息をつき、後部座席に身を沈めて、リコの絵に見とれた時のように、我を忘れて聞き入った。彼にとって、曲そのものになにか意味があるのではなく、ただ、楽器から洩れる最初の音が、彼の身の内にひそむ喜びの泉を開放するのだった。アラビアの漁師に利用される、壺に閉じこめられた魔神のように、普段その泉の源は心の底に押し込められて、出口を求めてもがいている。ポールは突然、生の強烈な喜びを感じる。目の前を交錯する光、そしてコンサートホール自体が、すさまじい輝きとなって燃え上がる。ソプラノ歌手が登場すると、ポールは嫌いな教師が来ているという胸の悪くなるような事実もすっかり忘れて、こうしたひとかどの人物がもたらす独特な陶醉に酔いしれた。この日の歌手はドイツ人女性で、どうみても若くない、おそらく何人も子供を持っているような年齢だったが、非常に凝ったドレスを着て、髪にティアラを載せた姿はなかなか立派で、世界中が彼女に微笑んでいるような、プロフェッショナルらしい風格があり、これぞ本物のロマンス女王、と感じられた(ポールは彼女の欠点など目に入らなかった)。

コンサートの後、眠りに落ちるまでの間、ポールは落ち着かない、みじめな気分であることが多く、この晩は特におちつかなかった。この昂揚した心持ちをなだめてはいけないと思う、これこそが唯一の生の証、と思えるほど贅沢な興奮を捨て去ることなど、できはしない。最後の曲の途中でポールは控え室に引っ込み、急いで制服を着替えると、歌姫の馬車が停めてある脇の出口のところへすうっと出てきた。そこで彼女が出てくるのを、早足でゆきつもどりつしながら待っていた。

はるか向こうにはシェンリイホテルが、その四角い巨大な容積を、こまかい雨の中にぼう々と浮かび上がらせている。その十二階建ての窓の輝きは、クリスマスツリーの飾りによくある、中に火を灯したポール紙の家を思わせた。この街で行われる演し物で、多少なりとも役のついた俳優や歌手は、みなあのホテルに泊まっている。街で有数の工場主たちも、冬の間はあそこに滞在した。ポールはあのホテルのまわりをうろつくことしばしばで、人の出入りを眺めながら、教師たちやつまらない気苦労などはきれいさっぱり振り捨て、あそこに入りたいと切に望んでいた。

ついに歌姫が出てきた。指揮者が手を添えて馬車まで誘う。ドアを閉める時、彼は「ごきげんよう（アウフ・ヴィダーゼーエン）」と暖かく声をかけ、それを見たポールは、二人はかつて恋人同士だったかもしれないとふと思った。ポールはホテルまで、馬車の後を追った。かなり早足で追いかけたので、シルクハットと長いコート姿の黒人ボーイが控えるガラスの自在ドアの中に、馬車を降りた歌姫がすいこまれていくのを、あまり遠くないところから見るこができた。その瞬間、わずかながらも開いているドアを見て、ポールは自分も中に入ったような気がした。彼女の後を追ってホテル前の階段を駆け上がり、華やかな照明のきらめく暖かな建物の中へ。異国趣味と南国情緒に溢れる輝かしい景色、心休まる世界。ポールはサンデールド——日曜版の新聞で見た晩餐会の写真を思い浮かべた——ダイニングに次々運び込まれる魅惑の料理、氷入りのペールにつかった緑いろのガラス壺。その時突然、一陣の風とともに雨が激しく打ちつけて、ポールはハッと我にかえると、外の砂利道のぬかるみの中につたっていている自分を見いだした。長靴には水がしみ

こみ、薄手のコートは濡れて身体にまとわりついている。コンサートホール前の照明も落ち、降りしきる激しい雨が、頭上のオレンジ色の灯火と彼を隔てた。あそこには、在る——自分が本当に欲しかったものが。クリスマスの無言劇でやるおとぎ話のような、あまりにわかりやすい形で。しかしあそこでは精霊が番をしていて入れないようになってる。雨に頬を打たれながら、ポールは自らを呪った。自分はいつもこうやって、暗い夜、外に立って、震えながらあの窓を見上げていなければならない運命なのかと。

肩を落とし、彼は路面電車の駅まで引き返した。こんな生活、いつまでも続けていられるものか。父親は、寝間着姿のまま階段の上で待ちかまえている。説明にならない説明、どんどんボロが出る安易な即席の嘘、二階にある自分の部屋、ぞっとするような黄色い壁紙、ギイときしむ化粧ダンス、その上に置かれた、カラーを納める脂じみたフラシ天の箱。ペンキが塗られたベッドの上にはジョージ・ワシントンとジャン・カルヴァンの肖像画、物心つくまえに死んだ母が、赤い糸で刺繍した「我が子羊を養え」という箴言を納めた額。三十分後、ポールは（ネグリー・アベニュー線）電車を降りて、大通りから遠くはなれた小道を歩いていた。そこそこの中流の会社員の住む界隈で、どこの家も子だくさん、どれもこれも似たような家ばかり並んでいた。子供はみな日曜学校に通って小教理問答を唱え、そろばんをはじくことにしか興味がない。彼らの住む区画同様、なにもかも似たり寄ったりだった。ポールはコーデリア街を、嫌悪の身震いなしでは通れなかった。隣には、カンバーランド長老教会の牧師が住んでいた。家に戻る時、ポールはいいようなない無力感、醜悪で通俗なものの中にいつまでも沈んでいくような、救いがたい絶望に襲われるのだった。コーデリア街に入ったとたん、自分がどっぷり水面下に沈んだ気がした。生の饗宴を味わった後はいつも、放蕩の後のような、肉体的な疲れを感じてしまう。すべていとわしい——ご立派なベッド、同じような食事、食べ物の臭いのしみついた家、精彩を欠く日々の営みに身震いがする。彼は、ぱりとしたもの、柔らかな光、咲いたばかりの花々を、熱病のように求めている。

家に近づき、これから視界に入るものすべてを思うと、ポールはますます耐え難くなってきた。おぞまし

い寢室。寒々とした浴室に、湯垢のこびりついた亜鉛メッキの浴槽、割れたままの鏡、ポタポタと水漏れがとまらない水道栓。父は階段の上で、寝間着の裾から毛深いすねをニューウツと突きだし、毛氈のスリッパをつっかけて仁王立ちで待ちかまえているだろう。今日はとりわけ帰宅が遅れたのだ、あの父が理由もきかず、難じることせすにすませるわけがない。ポールは家の戸の前ですこし立ち止まった。今晚は父親の声をききたくない、あの惨めなベッドで転々と寝返りをうつのも勘弁だ。ドアをくぐるのはやめだ。電車賃もなく、雨もあまりにひどかったので、友達の家まで一緒に行って泊まってきつたと言いつくすべし。

そうしているうちにも、身体は濡れ、冷えてくる。家の裏手に回って、地下室の窓を調べた。鍵のかかっていない窓を用心深く開き、地下室の壁をつたって床へ降りる。息をつめ、自分のたてた音におびえながら、じっとその場で気配をうかがっていた。しかし上の階は、しんと静まりかえっていて、階段をきませて降りてくる音も聞こえてこない。ポールは石鹼の木箱を見つけると、暖炉の仕切り戸のあたりから漏れてくる柔らかな光の輪が落ちているところへ持つていき、腰をおろした。鼠がひどく怖くて、ポールは眠るまいとした。暗闇の中で不安げに目をこらしながら、父の目を覚ましてしまったのではないかと恐れた。やるせないカレンダーの空白から一瞬抜け出すような体験をして、すっかり五感が鈍っている時、ポールの頭はいつも不思議に冴えかえった。もしかして、父は、誰かが窓から入ってきた物音をききつけて階段をおり、泥棒かと思って息子を撃つかもしれない。もしくは、拳銃を持っておりてきた父は、息子がつさに大声を上げなかったら、すんでのところまで撃ち殺していたのかとぞっとしたろうか。それとも父は、いつか今晚のことを思い出して、ポールが制止の声を上げずにいてくれたらどんなによかったかと考えるだろうか。最後の空想が気に入って、ポールは夜明けまで、胸の内でもてあそび続けた。

次の日曜日は快晴だった。ぐずつく十一月の肌寒い陽気はその日、突然の夏日にとってかわられた。午前中、ポールはいつも通り、教会と日曜学校に行かねばならなかった。このすこしやさしい時期、日曜の午後と



いえば、コーデリア街の中流市民は、自宅前の玄関前の《階段》に座って過ごすのが常で、同じく階段に腰掛けたお隣さんに話しかけたり、通りの向こうの家に親しげに声をかけるのがしきたりになっていた。男たちは、歩道に降りる階段に派手なクッションを並べてにこやかに腰をおろす。女たちは日曜の《晴れ着》を着込み、窮屈なポーチで揺り椅子に身をせずめながら、いかにもくつろいだ風を装っている。子供たちといえば、通りで遊んでいるのだが、あまりに数が多いので、こはまるで幼稚園の運動場のようなだった。階段の上の男たちは（みなワイシャツ姿で、チョッキのボタンをはずしていた）、大股を開き、ふくれた腹をつき出し、物価について、もしくは自分の上司やお偉いさんがいかに有能か自慢しあう。つまらない喧嘩をしている子どもたちに時々視線を投げ、その鼻にかかった甲高い声に楽しそうに耳を傾け、子どもの中に自分の癖を見つけては微笑み、鉄鋼王の伝説を語り続ける。子供の学校での成長ぶり、彼らの算術の成績、貯金箱にいくら貯めているかなどという話と一緒に。

十一月最後のこの日曜日、ポールは午後をずっと、自分の家の階段の一番下の段に座り、通りをじっと見つめていた。姉たちは揺り椅子に座り、お隣の牧師の娘と、先週何枚シャツブラウスをこさえたか、前回の教会の夕食会で誰が何枚ワッフルをたいたかなどと話していた。暖かく、父親が特に上機嫌な日は、姉たちはレモネードをつくり、青い七宝細工で忘れな草を描いた赤いガラスの水差しに入れて出す。娘たちはこの水差しを素晴らしいと思っているが、近所の連中はその色は怪しい、中身は酒だろうと冗談を飛ばした。今日はポールの父親は階段の一番上に座り、おずかる赤ん坊を膝の上で揺すっている若い男と話をしていた。この男はポールが模範にすべき人間として常々あげられていて、息子がこの男を見習ってくれることを、父親は切実に願っていた。この青年は血色よく、赤い口唇はキリリと引き締まっている。色の薄い瞳は近視で、分厚い眼鏡の金いろのつるを耳にかけていた。彼は大きな鉄鋼会社の重役ぶきの秘書で、コーデリア街では未来ある若者と目されていた。五年ほど前のこと——今この男はようやく二十六になったばかり——ごくつまらない《放蕩》に身をやつしていた彼は、若気の過ちにもなう時間と体力の損失をおそれ、性欲を

手なずけるために、他の従業員と同じく、上司の助言にしたがって、苦楽を共にしようじゃないかと口説き落とした最初の女性と二十一の若さで結婚したのだ。花嫁は彼よりずっと年上のギスギスした女教師で、彼女も分厚い眼鏡をかけていた。今では四人の子供を産み、子供たちは母に似て、みな近視だった。

青年は上司の仕事ぶりを語った。地中海をクルージングしながらも仕事の詳細に精通しており、船の上でも家と同じ時間に仕事をし、《速記者を二人やとつてもおいつかないような仕事を指示してくる》のだそうだった。ポールの父がそれに対して、いま、自分の会社がイリノイ州ケアローに電車を通す計画をたてていると話した。ポールは齒ぎしりした。そこへ行く前に、なにもかもぶちこわしになってしまふような強い危惧に襲われたからだ。それでも彼は、日曜や休日に繰り返し語られる、鉄鋼王の伝説に耳を傾けるのは好きだった。ベニスの大邸宅、地中海のヨット、モンテ・カルロでの大博打の話は彼の想像をかきたてたし、一介の現金取次係だった少年・カーネギーの成功談にも興味があつた。とはいえ自分が店の見習い小僧になる気は、さらさらなかった。

夕食がすんで皿を洗っている時、ポールはおずおずと父親に、ジョージの家に幾何を教わりにいっていかどうか尋ねた。それからなお一層おどししながら、電車賃をもらえないかとつけ加えた。二番目の問いは繰り返さねばならなかった、彼の父は基本的に金額の多少に関わらず、出費の話を好まない。父親は、もっと近くの友人のところに行けないのか、宿題を日曜日まで残しておいてはいかん、といひながらも、十セント玉を渡してくれた。彼は別に貧乏なのではない、だがこの世で成り上がってやるという偉大な野心がこの父にはあつた。ポールに案内係のアルバイトを許しているのも、男たるもの、なにがしかでも自力で稼ぐべきであると考えているからだ。

ポールは二階へ駆け上がり、胸の悪くなるような嫌な香りの石鹼を使って、皿の汚れ水の脂じみた匂いをゴシゴシと洗い落とし、引き出しに隠しておいた董の香の化粧水を、掌に二、三滴ふりかけた。幾何学の教科書をこれみよがしにかかえながら、ポールは家を出た。そしてコーデリア街を抜けて繁華街行きの路面電

車に乗り込んだ時、彼はこの二日間の死にそうな無感覚を振り捨てて、再び生の世界に戻ってきた気がした。ポールは、繁華街の劇場専属劇団の若い花形と知り合いになって、日曜夜のリハーサルならいつ見にきても構わない、といわれていた。もう一年以上、ポールはひまさえあれば、チャーリー・エドワーズの楽屋にしょっちゅう出入りしている。ファンの中から彼が一步抜きこんだのは、この若い役者に衣装係を雇う余裕がなく、ポールなら便利に使えるからというだけでなく、教会の人間がいうところの《思し召し》のようなものを感じて、側に置いていたのだった。

この劇場と、カーネギー・ホールこそ、ポールの生きる場所だった。残りの人生は眠ることと、無視すべきことのみ。ここはポールのおとぎ話の世界、秘密の恋の魔力がまつた世界だ。舞台の裏側で、ガスや、ペンキや、埃の臭いをかぐ時、やっと自由になった囚人のようにポールは深呼吸をする。なにか素晴らしいことをしたり言ったりする力を得られた気分になる。オーケストラが「マルタ」序曲を打ち鳴らす時、「リゴレット」のセレナーデを奏で出す瞬間、すべてくだらない醜いものは、ポールの身体から抜け落ち、五感は一瞬に冴えわたり、あまつさえ優しくかきたてられるのだ。

ポールの住む世界では、ありのままの自然はあまりにも醜いみかけをしており、それゆえなにか人工的な要素をもつものでないと、美を感じさせなかった。なにしろ外の世界は、日曜学校のピクニックだの、けちくさい俚約だの、ためになる人生成功術だの、たえがたい料理の匂いだので溢れかえっている。だからこそ劇場は、彼の心を心躍らせる。小綺麗に着飾った男や女に魅了され、スポットライトの下で永遠に咲き誇る、果樹園の林檎の花の白い輝きに感動してしまうのだ。

この舞台の入り口が、ポールにとってどんなに確かな官能の物語の入り口だったか、語りえる人間はいないだろう。劇団員は誰も、特にチャーリー・エドワーズは夢にも思っていなかった。それは、ロンドンでまことしやかに囁かれた古い伝説に似ていた——富裕なユダヤ人が地下に大広間をこしらえて、そこに椰子を植え、噴水をそなえつけ、柔らかな灯火の下で贅をこらして装ったご婦人方が、夜明けも知らずに暮らして

いる。煤煙にすすけた街に住み、数字と骨折り仕事のはざままで暮らしながらも、ポールは秘密の寺院を胸の中にこしらえていた。魔法の絨毯も、永遠に翳さすことのない、白く砕ける青い波に洗われる地中海の浜辺も、そこにあった。

教師の中には、ポールの空想はこけおどしの小説の読み過ぎて歪められたと考えた者もいたが、実際の彼は、小説などまったく読まなかった。家にある本は若者の心を墮落させることもないかわり、惹きつけもしなかった。友人が読めと熱心に薦めてくれた本すら同じだった。音楽の方がとり早く心満たしてくれた。音楽ならどんな種類の音楽でもいい、オーケストラでも手回しオルガンの調べでも。必要なはただ命の閃き、想像力が五感を支配する、名状しがたいスリルのみ。物語の筋も背景も、思うまま自分でつくれた。とはいえ、俳優志望の夢にとりつかれているかという点、それもまた違うのだ。音楽家にも俳優にもなる気はなかった。そんな必要はみじんもない、彼が望むのは、ただ味わうこと、雰囲気にはたること、その場を漂い、次々に来る青い波に運ばれて、何もかもから自由になることだった。

舞台を訪ねた夜の後、教室はさらに厭わしい。おきだしの壁や床、フロックコートを着たことも、董の花をボタンホールに挿したりもしない無趣味な男性教師、やぼったいドレスを着て、与格を支配する前置詞について気の毒なほど真面目に、甲高い声で講釈をたれる女性教師。こんな連中を真剣に相手していると他の生徒に思われるのは、一瞬たりとも耐えられない。彼にとつては全部つまらないこと、この場にいるのはジョークみたいなものだと思わせなければ。ポールは劇団員全員の写ったサイン入り写真を持ち歩いて級友に見せ、どれだけ彼らと親しいか、カーネギー・ホールで歌うソリストと知り合いで、一緒に食事をしたり花を贈っているのだなどという、皆がとうてい信じられないような話をした。話の効果が薄れ、聴衆が興味をなくしたと見るや、彼は最後の手段として別れを告げる。しばらく旅に出るつもりだ、と。その行く先は、ナポリ、カリフォルニア、エジプト……月曜になると、ポールはなにげなく学校へ戻ってきて、きまりわるげに笑いながら、姉が病気になったので、春まで旅行は延期したというのだ。

学校におけるポールの立場は、確実に悪くなっていった。教師やお説教を徹底的に見下しており、他では大変評価されていることをなんとかして知らせようと、眉をピクリと上げ、教師達が困惑する精一杯の去勢をはって、定理なんかもてあそんでる時間はないんだ、僕は劇団員と古くからの友人で、仕事を手伝っているんだなどいいだした。

事ここに至ってついに、校長が父親に話をした。ポールは学校をやめさせられ、勤めに出された。カーネギー・ホールの支配人は代わりの案内係を雇う羽目になり、門番もポールの出入りを禁止するよう申し渡された。チャリー・エドワーズも深く後悔した様子で、二度とポールと会わない、と、父親に約束した。

ポールの話をきいて、劇団員はみな大いに面白がった——特に女性陣が。骨身を惜しまず働いて、まずしい怠け者の夫や兄弟を養っている彼女たちは、自分たちがポールを熱くきらびやかな空想に駆り立てたのを知って辛辣な笑みをうかべた。そして学校や父親に賛成した、ポールの場合は、どうしようもない、と。

荒れくるう一月の吹雪をかきわけ、東部行きの列車はひた走る。どんよりとした灰色の夜明け、ニューヨークを一マイルほどすぎたところで汽笛が鳴る。席で丸くなり、不安な浅い眠りの中にいたポールはハッと飛び起きた。乗客の息で曇った窓ガラスを掌でこすり、外を見る。雪は渦のようになって白い大地を吹き荒れていた。野にも柵沿いにも、吹きだまりはすでに深かったが、あちこちで丈の高い枯れた牧草や乾いた雑草の茎が、黒い影となって突きだしている。点在する家からは光がもれ、線路脇に立つ作業員の団が、カントラをふって合図している。

ほとんど眠れず、しかも身体が薄汚れた感じがして、ポールは不快だった。夜行列車を選んだのは、一等寝台車両では**自分の服装がはずかしかったし**、ピッツバーグの実業家に見られて、デニー&カーソン商会の小僧だと気づかれる可能性があったからだ。警笛で目覚めた瞬間、ポールははっと胸ポケットをつかみ、自信なさげな笑みを浮かべて周囲をうかがった。泥はね仕事の小柄なイタリア人たちは、まだ眠っている。通

路の向かい側にいる身持ちの悪そうな女たちも、ぽかんと口をあけっぱなし。口のまわりにパンくずのついた赤ん坊でさえ、その時は泣いていなかった。ポールは席で身体を伸ばし、はやる心を懸命になだめようとした。

ジャージーシティの駅につくと、ポールは明らかに落ち着かない様子で、周囲に鋭く目を光らせながら、あわてて朝食をかきこんだ。二十三丁目駅で降りると、辻馬車を雇って様子をきき、開店間もない紳士服の店へと走らせた。ああでもないこうでもない慎重に品定めしながら、二時間をこえる買い物を楽しむ。三つ揃いを試着室で着込み、フロックコートと礼服を、新しいシャツと包ませて馬車へ。それから帽子屋、次は靴屋へ。新たなおつかいはティファニーで、銀の小物と新しいスカーフピンを買った。イニシャルを刻んでもらうひまはない、といって店を出る。最後にブロードウェイの鞆屋に行き、旅行用のトランクをいくつも買い上げて、それまで買った物を詰めさせた。

ウオルドーフホテルに乗りつけた時には、一時を少し回っていた。御者に金を払い、フロントに入った。宿帳にはワシントンから来たと書き、両親が外国から戻ってくるので、汽船を待ちきれずに来てしまったんだと告げた。もっともらしく話したし、前金を払ったので、何の問題もなく、寝室とリビングと浴室付きの部屋を借りられた。

ニューヨーク入りする計画は、数え切れないほど検討し、入念に練ってあった。チャーリー・エドワーズと街の細部を調べ上げていた。家の雑記帳は、日曜の新聞から切り抜いたニューヨークのホテルの記事で埋め尽くされていた。

八階のリビングに入ってあたりを見回し、有るべきものが有るべき場所にあるのを確認したが、彼が思い描いていた心の絵と比べて、一つだけ足りないものがあった。呼び鈴を鳴らしてボーイを呼び、花をもってこさせることにした。ボーイが戻ってくるまで、ポールはそわそわしながら、新しいシャツを片付け、ついでに嬉しそうに指を滑らせて待っていた。花が来ると、ポールはすぐに水に投げ入れ、自分は熱い風呂に飛

び込んだ。ほどなく彼は、新しい、輝くばかりのシルクの肌着をつけ、赤いローヴの飾り房をもてあそびながら、白亜のバスルームより登場した。窓の外は相変わらず吹雪がたけりくるっていて、通りを挟んだ向こう側も見えないほどだが、室内の空気はあたたく心休まり、そしてかぐわしかった。堇と黄水仙をソファ脇の小卓へ置くと、長いため息をついて身体を投げ出し、タペストリー風のブランケットをひっかける。骨の髄まで疲れ切っていた。とにかく急いだし、あの緊張と二十四時間戦い続けて、長い道のりをやってきたのだ。それでも、これがどんな風にして実現したのか、思い返さずにはいられない。風の音に、暖かい空気が素晴らしい花の香りに慰撫されて、彼はうとうと回想に沈んでゆく。

ことは驚くほど簡単だった。彼が劇場とホールから閉め出された時、つまり、大切な時間が取り上げられた瞬間、すべてのなりゆきは自動的に決まった。あとは機会を待つだけだった。自分にこんな度胸があるということだけが、我ながら驚きだった。今までずっと不安に苦しめられていたのだ。特にここ数年は、破壊の予感に脅やかされ、自分で吐いた嘘の巢にとじこめられ、身体をかんじがらめにされて動けなくなっていた。物心ついてから、恐れを感じずにいた記憶がない。幼少の頃から、恐怖はついて回っていた。彼の背後に、目の前に、もしくは両脇に。それは薄暗い一角、あえて覗いてはいけない暗い場所、しかしそこから何者かが、常にこちらを見張っているような気がした——そして彼も、それに見られたくないことをやらかしているのを承知していた。

だが今のポールは、奇妙な安堵の念にひたっていた。その一角にひそむものに、ついに挑戦状を叩きつけた気分だったのだ。

あの決まりきった退屈な生活から逃れて、まだ一日しかたっていない。いつものようにデニー&カーソン商会の預金を持って銀行に行ったのは、つい昨日の夕方のこと——しかし今回は、簿記の確認作業があるので、帳簿を置いてくるようにわれていた。彼は二千ドルを越える小切手と、千ドル近い現金をその帳簿から引き出して、こっそりポケットに忍び込ませた。銀行に新しい預け入れ伝票を書いて出し、その足で事務所

にとつてかえすだけの剛胆さを持ちあわせていた。もっともらしい口実をこしらえて、翌日土曜の休みを申請する。通帳は月曜か火曜になるまで戻つてこないし、彼の父は翌週は、町にはいない予定だった。ポケットに札束を滑り込ませてからニューヨーク行きの夜行に乗り込むまで、一瞬たりともためらうことがなかった。**危ない橋を渡るのは初めてではなかった。**

驚くほどすべては簡単だった、もうきてしまった、もうやってしまったのだ。今度こそ夢ではない、階段の上に立つ父の影におびえなくてもいい。窓の外を舞い踊る雪を眺めるうち、いつしかポールは眠ってしまった。

目覚めるともう午後三(四)時だった。ポールは驚いて飛び起きた。大事な最初の日がもう半分もすぎていた！ いちいち鏡で確認しながら、彼はたっぷり一時間近くもかけて念入りに身ごしらえをした。すべて申し分ない。この姿こそ、彼のなりたかったものだ。

階下へ降り、馬車をやとつて五番街を走らせ、ポールはセントラルパークへ向かった。雪の勢いはやや弱くなつていた。馬車や荷馬車が、音もなく冬の黄昏を行き来している。毛糸の襟巻きをした少年が、ドアの階段の雪かきをしていた。白一色の車道と、色鮮やかな対比をなす幾つもの並木道。そちこちの街角のウィンドウには完璧な花園が存在した。雪片はガラス窓にはりつき溶けてゆくのに、その中では董が、薔薇が、カーネーションが、すずらんが、雪の中だというのに、自然に逆らい、だがひろやかに、美しくも妖しく咲き乱れている。セントラルパークそのものが、冬を舞台にした芝居の見事な一幕のようだった。

ホテルへ戻る道すがら、黄昏の光は消え、町の様子が変化しはじめた。雪の勢いが増し、十二階のホテルの窓から流れ出す灯火の輝きは、大西洋から吹き付ける強風にびくともせず、摩天楼は嵐をもおそれず高くそびえていた。長く、黒い馬車のつらなりはそちこちで交差し、その流れは地平線まで広がっていた。彼が宿泊しているホテルの入りに、沢山の馬車が止まっており、降りるのを少し待たねばならなかった。元気がいいのボーイたちが、歩道にはりだした庇の下、入り口から車道まで敷かれた赤い天鵝絨の絨毯の上



を、忙しげに走り回る。その風景のすべて、その喧噪、ポールと同様、幾千の人間が忙しく躍動し、熱い快樂を求めていた。富の全能を物語るものが、いたるところでまばゆくそびえたっていた。

ポールは現実の自覚に思わず齒をくいしばり、肩をしゃんとさせた。これこそが、すべての劇の筋、物語の本文、五感のすべてをゆさぶる興奮が、雪片のように彼の周囲を踊っている。あらしの中の薪のように、彼は燃えさかっていた。

晚餐に降りていくと、エレベーターの吹き抜けからのぼってくるオーケストラの調べに迎えられた。人通りの多い廊下に出ると眩暈がして、そこにあつた椅子に身を沈めると、彼は呼吸を整えた。眩しいばかり、おしやべり、香水の香り、めまぐるしい色彩——一瞬、すべてたえがたくなった。しかしそれはほんの一瞬で、ここにいるのは自分と同じ人々じゃないか、と彼は自分に言いきかせた。ゆったりした歩調で廊下を歩き、それぞれの部屋、書斎や喫煙室や待合いを、彼はじっくり探検してゆく。これは魔法の宮殿だ、彼のためにつくられた部屋、彼のためだけに用意された人々なのだ。

正餐室では窓際のテーブルについて。活けられた花、真っ白なテーブル掛け、色とりどりのワイングラス、きらびやかな身仕舞いの女たち、コルクがポンと抜ける小さな音、繰り返しオーケストラが奏でる《青きドナウ》のたゆたう調べ。めまいがするほどの輝きとともに、ポールの夢に流れ込んできた。それに、最良のシャンパン——グラスの中できめ細かに泡立つ、なめらかな（つめたく、高価な）液体——その薔薇色のひとはけが加わった時、ポールは地道に働く人間の存在を疑いたくなった。こう思ったのだ、これこそがすべての人間が求めるもの、苦闘のすえに手にする価値のあるものだろうと。自分の過去は、あれは本当のことだったかと疑わしくなってきた。早朝の電車で揺られ、あくせく働く会社員が住むコデーリア街などに、本当に自分はいたのだろうか。彼らには機械の目釘ほどの価値もない。子どもの抜け毛を上着にくっつけたまま、食べもののにおいが染みついた服を着た、胸の悪くなるような連中め。コデーリア街——あれはまるで別の時代の、他の国の出来事だ。自分はずっと前から、毎晩ここに座っていたのではなかったか、自分が思

い出せる限り、シャンパンの輝きを眺めながら憂いに沈み、親指と中指でグラスの脚をつまんでゆったり回していた。そんな風に思えてきた。

ここでは少なくとも、所在ないとも孤独であるとも感じない。ここにいる人間達と近づきになろうとも思わなかった。彼に必要なのはただ人々を観察し思いめぐらすこと、この演し物を見つめること。小道具さえ揃っていればそれ以上何も望まない。夜遅く、メトロポリタンホテル劇場の栈敷席に（オペラハウスの枡席に）ひとり座っていても、寂しくなごなかった。もやもやした心の不安も、おやみな虚勢も、周囲とは違うのだと主張せずにはいられない衝動も、すべて消えさっていた。今はいるべき場所にいるのだ。上品な服を着ていても取りざたされない、ただ黙って着ていけばよいのだ。もう誰も自分を辱めることはできないと安らかな気分になるには、ちらりと自分の燕尾服を見下ろすだけでよかった。

その夜は美しい居間から立ち去り難く、なかなか寢室へ向かう気になれなかった。出窓のところに座って、荒れ狂う雪嵐をずっと見ていた。眠る時も灯りは消さなかった。それは、まだ暗闇が怖いというのもあったが、むしろ夜中に目覚めた時、少しでも不安になりたくなかったからだ。黄色い壁紙や、ワシントンやカルヴァンの肖像画がもしそこにあるのを見てしまったらなどと、余計な恐怖を覚えずにすむ。

日曜の朝、ニューヨークの街は、文字通り雪に鎖された。遅い朝食をとったその日の午後、サンフランシスコから来たという磊落な青年に出会った。イエール大学の一年生で、《週末にちよつと羽目をはずす》のためにきたという。ポールにナイトライフを教えてやろうといい、二人は事実、夕食後、連れだつてでかけ、翌朝七時までホテルに戻らなかった。最初はシャンパンで熱い友情を誓ったが、エレベーターで別れる時にはそれはすっかり冷え切っていた。学生は気をとりなおして駅に向かい、ポールはベッドへ倒れ込んだ。目覚めたのは午後二時、喉がカラカラで眩暈がするので、ボーイを呼んで氷水とコーヒート、ピッツバーグの新聞を幾種類か持ってこさせた。

ホテルの中では、ポールは疑われるようなことを一切しなかった。威厳をもって戦利品を着こなし、目立

つような振る舞いを決してしなかったことは誇ってもいい。ワインの輝きは、不思議の城をこしらえる手品師の魔法の杖だと思ったが、のんで乱れることなかった。彼はもっぱら見たたり聞いたりをむさぼるだけで、度は過ぎていくものの、他人を害することはしなかった。彼の一番の願いは、灰色の冬の黄昏の中、居間で静まりかえっていることだった。花の美しさを、新しい服を、大きな長椅子を静かに愛で、煙草と、手にした力の実感を味わうこと。こんなに心安らかでいられたことが、今まで一度としてあつたらうか。つまらない嘘を毎日つかなくてもよくなったので、彼の自尊心は息を吹きかえしていた。楽しいから嘘をついていたのではない、学校でもそうだった。コーデリア街の他の連中とは違うんだということを認めてもらい、評価されたかった。だから今は、男らしく正直な気持ちになっていて、俳優の友が常々語っていた《役そのものの服装》をしているためか、尊大な欲求も消えていた。悔恨の情がまったく湧かないのはおかしなほどだった。黄金の日々には少しの翳もささず、ポールはすべて完璧な毎日を過ごしていた。

ニューヨークについて八日目、ポールはついに、ピッツバーグの各紙に事件のすべてが暴かれているのを発見した。街では他にろくな事件がなかったのか、彼の事件は事細かに報道されていた。盗まれた金は父親がすべて返済しており、デニー&カーソン商会はポールを訴えるつもりはないとのことだった。カンバーランド長老教会の牧師はインタビューに答えて、母のいないこの少年の更正に助力したい旨を述べ、日曜学校の女教師も、そのためには最後まで努力を惜しまないと答えていた。ポールがニューヨークのホテルで目撃されたという噂はピッツバーグまで届いていて、父親が彼を連れ帰るために東部へ向かったと報じられていた。

その時彼は、夕食用の服に着替えるために、部屋に戻ったばかりだった。膝に力が入らず、頭を抱えて、ポールは椅子に倒れ込んでしまった。監獄に送られるより悪い。コーデリア街のなまめろい水が押し寄せてきて、ついに彼を永遠に閉じこめてしまう。救いも望みもない、灰色の単調な生活が、これから永遠に続くのだ。日曜学校、青年会会員の集い、黄色い壁紙の部屋、じめじめした布巾——胸の悪くなるような生々し

さをともなつて、過去が一気に押し寄せてきた。オーケストラの音楽が突然中断した時の気持ち、劇の幕切れにいつも味わうあの虚脱感。顔からどつと汗がふきだし、彼はハッと飛び上がった。血の気のうせた顔に、あえて雄々しい笑みを浮かべ、鏡の自分に目配せを試みた。勉強せずに学校へ行ってもなんとかなると、たかをくくる子どもの気持ちになつて、ポールは服を着替え、口笛を吹きながらエレベーターまで走つた。

正餐室に入るやいなや、音楽の調べに心奪われて、ポールの心は軽くなった。そういう瞬間を得た時、すべて満ち足りた気持ちになる持ち前の柔軟さを彼は持ち合わせていた。周囲のきらきらしいものは、単なる舞台装置に過ぎなかったが、それでも再び、これを最後とばかり、ポールに訴えかけてきた。自分が大胆な人間であることを証明し、事を立派にしめくくつてみせる、と彼は決意した。前よりさらに、コデリア街の存在が疑わしくなつてきた。そしてはじめて、ワインをおやみに空けた。自分は、この幸運な人々の一人でなかったのか？ 本来の姿で本来の場所に居るのではないのか？ 歌劇「道化師」にあわせて、神経質に指先でリズムを刻みつつ、周囲を見回しては骨折つた甲斐はあつたのだと、何度も自分にいいきかせた。

ヴァイオリンの抑揚や、ワインの冷たい甘さに物憂く沈みながら、ポールはもつと賢いやり方があつたかとも考えた。外国行きの船に乗れば、彼らの魔手から逃れられたかもしれない。しかし世界の果てでは遠すぎ、そこでの暮らしも想像の外だつた。待てなかつたのだ、すぐにでも満たされねばならなかつたのだ。もしやり直すことが出来たとしても、明日また同じことを繰り返したに違いない。ポールは正餐室を愛情こめて見回した。いまや柔らかな金色のもやがかかつて見える。ああ、ほんとうに骨を折つた甲斐があつた！

ポールは翌朝、頭や足がズキズキ痛んで目が醒めた。着替えもせずベッドへ身を投げ出し、靴も履いたまま眠っていた。四肢は鉛のように重く、舌も喉もカラカラで焼けるようだった。しかし頭は、致命的なまでに冴えかえっていた、身体がくたくたになつて神経が緩んだ時のように。目を閉じてじつと横になつたまま、現実の波に洗われるままになる。

父親はもうニューヨークまで来ている、《安宿を探し回っているのだろう》とポールは思った。玄関前で過ごした幾年の夏の記憶が、暗い水のように重く彼を押し包む。手元にはもう、百ドルも残っていなかった。今ますますはつきりわかった、この世界では金がすべてで、それが彼が嫌うものと愛するものの間に立ちはだかる壁であつた。すべてはいよいよ終わりを告げる。ニューヨークについた最初の日の華々しさを思い、その日に終わらせるための手段を用意していたことに思いをはせた。物は鏡台の上にあつた、昨夜晚餐から帰ってくる時に何も考えず持ち出してきたものだ。しかしあの金属の輝きは目を痛める。見るのも嫌になつてた。

ポールは骨折つて身を起こし、活動を開始した。しょっちゅう吐き気が襲ってくる。かつての憂鬱がさらにひどくなつて戻つてきた。世界はすべてコデーリア街と化した。それでも彼は、何も恐れてはいなかった。むしろすっかり落ち着いていた。なぜならついに、あの暗い片隅をのぞき込んで、その正体を知つたからだ。確かに見てしまったものは、あまりあるほど悪いものだった、しかし、あんなに長い間恐れていたものだと考えれば、そうひどいものでもなかった。すべては明らかになつた。本来生きるべきだつた人生を、最善をつくして生きられたという気持ちになり、三十分ほども座つて拳銃を見つめていた。しかしこれは違ふと思ひ、階下へ降りると馬車を捕まえ、船着き場へ向かつた。

ニューアークにつくとポールは電車を降り、あらたな馬車をつかまえて、郊外までペンシルバニア鉄道に沿つて走つてくれと指示した。車道には雪が分厚く積もっている。広い原っぱには雪がふきだまり、枯れた草やひからびた茎だけがつきだして、不気味な黒い影を落としている。だいぶ田舎まで来たポールは、馬車を返して歩き出した。線路に沿つてよろよろと、どうでもいい全てに心を乱しながら。午前中に見たすべての現実の絵を記憶にとどめておこうとした。二人の御者の造作、今コートを飾っている赤い花を売つていた歯なしの婆さん、切符をとつてくれた代理店の人間、一緒にフェリーに乗つたすべての客たち。間近に迫る決定的な出来事に立ち向かえない心は、熱にうかされて、器用にそのイメージを区分けし、分析していた。

しかしそれは、この世の醜さであり、頭痛の種でもあり、舌を刺す苦さの一部でもあった。道すがらポールは身を屈め、雪をすくって口に入れた。それでも暑さは変わらない。ポールは山腹まで来た。切り通しの、二十フィート下に線路が見える場所で、歩みを止め、腰を降ろす。

コートに差したカーネーションが、寒さでうなだれているのに彼は気付いた。その緋色の栄光は終わりを告げたのだ。最初の夜、雪の窓の中に見た花は、この花よりずっと前にこんな風に駄目になってしまったのだらうな、とふと思った。結局勝ち目のないゲームだとしても、たった一度だけの華やかな瞬間、外の冬景色に対して勇敢に立ちむかい、この世を動かす偽善に反抗したのだ。ポールはそっと花を外し、雪にちいさな穴をあけて埋めた。そして少しうとうとした。身体が弱っていたし、寒さで感覚が鈍っていた。

列車が近づいてくる音でポールは目覚めた。歩き出す、自分の決意だけを思い、遅すぎやなかったかと懸念しながら。近づいてくる機関車を、仁王立ちで彼は見た。歯がガタガタと鳴ったが、歯をみせてポールは笑った。誰かに見られてでもいるかのように、不安げに周囲を見回す。ついに時が来た。彼は飛んだ。落ちながら、早まったか、という奇妙に冴えた考えがよぎり、やり残したこと多くのことが胸に浮かんた。頭の中に鮮明に閃くのは、アドリア海の青さ、アルジェリアの砂漠の光景。

何かが胸にあたった——身体は恐ろしい勢いで宙を飛んだ。果てしなく早く遠く。おかげで手足から力が抜けた。心の絵を創り出すところが潰れたため、映像が乱れ、暗転する。ポールの場合にはこんな風に、巨大な神の構想の中へ帰ったのだった。

(二〇〇九年秋 鳴原あきら訳)